

キーワード: 死後の処置、葬祭業者、連携、遺体管理、家族ケア

○小林祐子、和田由紀子
新潟青陵大学

I. 研究目的

医療施設で亡くなった人の身体の整容を行うのは、主に看護職である。近年では遺体の変化を見越した死後の処置が提唱され、臨床でその見直しが広がりつつある。退院後の遺体の管理は、葬儀が終わるまで葬祭業従事者が行っているが、遺体のトラブルや遺体の管理に関する調査は少ない。本研究では、退院後の遺体の状況から医療施設で行われる死後の処置の内容を検討する。

用語の定義

死後の処置: 医師の死亡宣告後に亡くなった人の外観を整えるために行う身体の整容(清拭や更衣、死化粧)とする。チューブ類の抜去後の手当てや体腔への詰めものなども含み、医療施設内で看護師が行う処置と退院後に葬祭業者が行う処置を区別しない。

II. 研究方法

1. 対象

9 都道府県の葬儀会社および 24 都道府県の納棺士会社等 206 施設において、業務として遺体に接することのある 20 歳以上の葬祭業従事者 680 名。

2. 期間

2010 年 12 月から 2011 年 5 月。

3. 方法

無記名自記式質問紙調査。

4. 調査内容

医療施設から退院後の遺体のトラブル状況、医療施設で行われる処置への意見、医療者との情報交換など 32 項目である。

5. 分析方法

属性と感染予防対策、トラブルの状況について χ^2 検定、Wilcoxon の符号付順位検定を行い、危険率 5% 未満を有意差があるとした。

6. 倫理的配慮

対象に調査の趣旨、プライバシーの保護、調査の自由参加、結果の公表について文書で説明し、調査への協力が自由意志で参加できるように、事業所ごとでなく個別の郵送法で調査者の元に調査用紙が届くようにした。調査用紙の返送をもって、同意を得たものとした。

III. 結果

回収率は 34.6%、有効回答数は 232 であった。葬祭業従事者の経験年数は 10 年以下 44% が最も多く、平均 15.7(±10.5)年、年間の葬儀(または納棺)件数は 100 件以上が 42.7% と多く、エンバーマーの有資格者は 4 人(1.7%) であった。

1. 退院後の遺体のトラブルの状況

遺体に関するトラブルの経験 (n=228) については、開口が 216 人(93%)、開眼が 213 人(92%)、髭そり後の皮膚トラブルが 75 人(32%)だった。出血のトラブルは 218 人(94%)、部位は口、鼻、点滴抜去部の順であった。体液流出は 212 人(91.4%)、部位は口、鼻、耳の順であった。遺体に関して一番多く見られるトラブルは、開口 103 人(44.4%)、皮膚トラブル 74 人(31.9%)、体液流出 48 人(21.1%)、出血 41 人(18%)、

悪臭 29 人(12.7%)、開眼 11 人(4.8%)の順であった。

2. 医療施設での処置に対する意見

葬祭業従事者が医療施設で行ったほうがよいと考える処置は、太い点滴チューブの抜去後の縫合 186 人(80.2%)、死亡直後からの冷却 98 人(42.2%)、口腔ケア 203 人(87.5%)であった。また、医療施設から開口対策のためにあごを縛る 126 人(54.3%)、合掌をするは 147 人(63.4%)、であり、医療施設での死化粧の実施は 3 割程度だった。

医療者からの感染症に関する情報提供の希望は 226 人(97.4%)、退院後に予測されるトラブルに関する情報提供の希望は 223 人(96.1%)、遺体の変化に関する医療者の知識は、9 割が持っていたほうがよいと捉えていた。

処置への家族参加がグリーフケアにつながると考えている人は、医療施設での冷却 (p=0.003)、太い点滴チューブ抜去後の縫合 (p=0.008) が有意に高かった。また、家族の対応で困った経験がある人は、開口トラブル (p=0.000)、出血トラブルの経験 (p=0.021) に差がみられた。

IV. 考察

退院後の遺体には、外表上の開口や開眼だけでなく、体液流出や出血なども多く見られるトラブルであることが明らかになった。葬祭業従事者からの太い点滴チューブの抜去後の縫合への要望が 8 割と先行研究と同様に高かったことから、時間が経過しても体液流出等のトラブルが最低限となる死亡直後の処置が重要となる。また、伊藤²⁾の指摘する体液流出の予防となる死亡直後からの冷却へのニーズは高くなかったが、体腔への詰め物など従来の処置の内容の見直しに対する戸惑いの意見もみられたことから、今後は退院時に家族や葬祭業者にも情報提供を行う必要がある。遺体のトラブルの情報提供は 3 割程度であったが、家族にとっては身内の死を迎えることは非日常的なことであり、退院後の遺体の状況によっては家族の悲嘆過程に影響を及ぼすため、今後は医療職と葬祭業者との連携の充実が課題である。

V. 結論

医療施設から退院後の遺体のトラブルは開口、皮膚トラブル、体液流出の順に多くみられ、中でも出血や体液流出は死亡直後の処置による影響も考えられ、検討の必要性が示唆された。また、葬祭業従事者からは遺体に関する情報提供のニーズが高く、今後の連携のあり方が課題となる。

本研究は平成 22 年度科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号 21792242)による研究の一部である。

引用文献

- 1) 杉本真佐子、陶山香、清水晶 et al. より良い死後のケアを行うための葬祭業者への実態調査平成 22 年度新潟県看護協会看護学会集録. 2010 : 43-45.
- 2) 伊藤茂. 死後の処置に活かす遺体の変化と管理. 31-33. 東京都: 照林社; 2009.